ATHENA SOURCES IN THE HISTORY OF WORLD WAR I

The "Manchester Guardian" History of the War

2013年復刻刊行!現在のガーディアン紙直系の新聞社による戦争特集号。
およそ半年ごとに戦況を振り返り、事項を整理して編集するとともに索引も整備。
社会、政治の動向も戦後処理に至るまで詳報。
写真も大量に掲載、丁寧で堅実な内容の重要資料!

全9巻
分売可

定価 本体 270,000円+税

ISBN 978-4-86340-148-8 • c. 3300 pp. • A4判

Part 1: Volumes 1–3 (1914–1915)
ISBN 978-4-86340-149-5 • c. 1200 pp. • 定価 本体 90,000円+税

Part 2: Volumes 4–6 (1915–1917)
ISBN 978-4-86340-150-1 • c. 1040 pp. • 定価 本体 90,000円+税

Part 3: Volumes 7–9 (1917–1920)
ISBN 978-4-86340-151-8 • c. 1060 pp. • 定価 本体 90,000円+税

Athena Press

The "Manchester Guardian" History of the War について

1821 年創刊の *Manchester Guardian*。C. P. Scott は 1872 年から 1929 年まで 57 年もの長期にわたり同紙の編集に携わったことでよく知られた人物ですが、1905 年に社主にもなります。Scott のもとで、南アフリカでのイギリスの帝国主義的動向に対し、世論に反して異を唱えたり、社会問題の改善に関わる記事を出すなど、紙面はよりラディカルな傾向を強めます。1914 年、ヨーロッパ大陸で危機が差し迫った時も当初はイギリスは中立にとどまるべきとしていましたが、参戦が決定すると政府の支持に回りました。

そんな背景からこの *The "Manchester Guardian" History of the War* は、他の新聞社が出した同様の戦争特集に比べて客観的な内容になっており、社会的・政治的な現象や因果関係についてもより一層の注意が払われています。

紙面は、読者にこの戦争が進捗したとおりの正確な「歴史」を伝える目的にのっとった構成になっています。ただ毎週毎週の出来事を載せるのではなく、事項ごとに章を立て、索引をつけてきちんと整理された内容になっています。1914 年に第 1 巻が出されたのち 1917 年まで各年 2 冊が刊行され、引き続き 1919 年と 1920 年に各 1 冊が出されて戦争終結と戦後処理までカバーしています。公式の資料も必要に応じて掲載され、ほとんどのページに 1 枚ないし 2 枚の写真が用いられて、事実を丁寧に示そうとしており、こうした点もまた同時代の類書に比べて違いを見せていて、他紙にありがちな戦争を美化する試みは見られないものです。

本書を出版した John Heywood 社で、John と Abel の Heywood 兄弟の会社です。地元の作家の本や労働者向けの教育書を出すなどしてマンチェスターの社会と文化に多大な貢献をした出版社でした。

戦況、軍事動向以外の記事内容

■キャプチャータイトル:

内政: The War Crisis at Home • Labour in the War • Strategy and Politics • The Red Cross • Ireland and the War • The Last of the Voluntary System • Compulsion • The Extension of Compulsion • Women's Work in the War • The Arts in War Time • The Dublin Rebellion • The State and the Soldier • The Finding and Training of the Officer • Women in War Time • The Food Problem • The Women's Army • Social Changes in England during the War, etc.
国際情勢: The Response of the Empire • Opinion in the United States • The Intervention of Japan • Russia in War Time • Germany's Food Troubles • The War and the Far East • The War and the Dominions • The Entry of the United States • The Revolution in Russia • The Imperial War Conference • The Conquest of East Africa • The Collapse of the Russian Army in 1917 • Revolutionary Politics in Russia • India and the War • The Fate of Jerusalem • The Russian Revolution • The Coming of the Bolsheviks • Europe in 1920, etc.
財務状況: The Finance of the War • Pensions and Allowances • The War Budget • The Great War Loan • The Economic Policy of the Allies • Five Years' War Finance, etc.
法的関係: Sea-Power and Sea-Law • The Law and the Courts • The Defence of the Realm Acts and Personal Rights • Prisoners of War, etc.

■トピックス:

The Government's early policy towards aliens; Lord Bryce's report on German outrages in Belgium and France; China's relations with Japan; Chinese and American criticism of Japan; Belgian refugees in Britain; depreciation of stocks; the Hague Conventions; the Home Rule Bill; the Press Bureau; socialists and the War; songs of the British Army; "Single Men First"; Sinn Feinn prosecutions; Zeppelins; Rupert Brooke; cartoons on the War; literature in War time; closing of museums in London; women and the labour market; Sir Roger Casement; Coercion Acts in Ireland; disabled soldiers and sailors; origins of the Irish Rebellion; Japan's policy at Tsingtao; Red Cross scandals in Mesopotamia; conscription in Australia and Canada; the Somme film; liquor control; the Zionist movement in Palestine; creation of the Pensions Ministry; early closing order of shops; the elimination of typhoid; War Savings Certificates; etc.

ARMY RESERVE
SCHEDULE
7th April, 1916.

HISTORY OF THE WAR.
Marquis Okuma.

ATHENA SOURCES IN THE HISTORY OF WORLD WAR I

史上かつてない規模と様相を呈した第一次世界大戦開戦から100年という歳月が巡ってきています。アティーナ・プレスではこの現代のあり方に大きな影響を及ぼした戦争を伝えた同時代資料を復刻刊行してまいります。

それぞれ異なる視点や論点から編集されている4点の資料を扱います。いずれも戦時中の貴重な写真、地図、戦争画、ポスター、風刺画など、全体として数万点を数える大量の図版類を収録。ヨーロッパのみならず、中東、アフリカ、インド、極東アジアの戦線の状況が伝えられ、加えて戦時下の女性、ロシア革命、アイルランド問題、イギリスの植民地と連邦自治領などの問題にまで記事のテーマは広がり、第一次世界大戦の複雑な因果関係を織りなす各種要素がそれぞれ扱われています。

さらにこれら報道資料が、戦争の情報を伝える役割とともに、戦争の宣伝、プロパガンダの道具としての役割を持っていたことは重要な側面です。

2013年配本開始！ イラストレイテッド・ロンドン・ニュースが刊行した第一次世界大戦特集。

The Illustrated War News
Being A Pictorial Record of the Great War (1914–1918)

8回配本 全16巻・各配本定価 1−4回：本体 95,000円＋税／5−8回：本体 86,000円＋税

2013年刊行！ ガーディアン紙の戦争特集号。

The "Manchester Guardian" History of the War (1914–1920)

全 9 巻・定価 本体 270,000円＋税（分売設定あり）・ISBN 978-4-86340-148-8

2014年刊行！ デイリー・メールの出版グループによる大衆向け週刊誌の再編集愛蔵版。

The War Illustrated: Album de Luxe
The Story of the Great European War Told by Camera, Pen and Pencil (1915–1919)

全10巻・定価 本体 285,000円＋税（分売設定あり）・ISBN 978-4-86340-160-0

2015年刊行！ 戦後およそ20年後に出された戦争体験談集。週刊全51号。著名人も多数。

The Great War … I Was There!
Undying Memories of 1914–1918 (1938–1939)

全 6 巻・定価 本体 168,000円＋税（分売設定あり）・ISBN 978-4-86340-161-7

【発　行】
Athena Press
株式会社 アティーナ・プレス

〒112-0011　東京都文京区千石4-33-18
Tel：03(3946)2117　Fax：03(5977)8026
E-mail：eigyo@athena-press.co.jp
http://www.athena-press.co.jp

【取扱書店】

鮮やかに浮かび上がる大戦の諸相

木畑 洋一●成城大学教授

1914年から18年にかけて戦われた第一次世界大戦は、ヨーロッパの国々に深い傷跡を残した。イギリスやフランスでは、この大戦で後の第二次世界大戦よりもはるかに多い犠牲者が出たのである。現在でも「大戦争」(the Great War、la Grande Guerre)と呼ばれて追憶されることが多い所以である。第一次世界大戦には日本も参戦したが(中国や南太平洋でのドイツ領を攻撃、占領した)、犠牲が小規模にとどまったこともあり、第二次世界大戦と異なり、この戦争は日本人の歴史的記憶の中にはほとんどとどまっていない。それだけに、この戦争について具体的なイメージを抱くことは、容易でない。今般アティーナ・プレスから出版されるこの四種類の資料は、中心的な参戦国であったイギリスで、大戦中に戦争の姿がどのように捉えられ、どのように報じられていたかを多面的に示しており、この戦争についての私たちのイメージを非常に豊かなものにしてくれる。

今回出版される資料の内、最大のものは、*The Illustrated War News* である。1842年に刊行が開始され、イギリスおよび世界の状況を絵や写真で報じた *The Illustrated London News* がいかに豊富な内容を備えていたかは、日本でもすでによく知られているが、これはその出版社が大戦に焦点を絞って週刊で刊行した雑誌である。イギリスの参戦が1914年8月4日で、この本の第1号は8月12日付けで出されているから、開戦にすぐに対応したことが分る。巻頭に若干長い文章が掲載されている以外は、写真や絵がぎっしりとつまっていて、頁を繰っていくと、戦場の多様な光景をカメラや絵筆で伝えようとした戦場報道家の熱気が伝わってくる。対象となっている兵士は、やはりイギリス軍が一番多いが、フランス兵はじめ他国の兵士も扱われている。戦う兵士だけでなく、戦闘の合間に遊ぶ兵士(たとえば戦艦の甲板でのクリケット風景)の姿も捉えられている。筆者の研究関心との関わりでは、イギリス軍に加わったインド兵や、フランス軍に参加したアフリカ兵、安南(インドシナ)兵など、植民地から動員された兵士の姿が、豊富に示されていることが、きわめて印象的である。アジア・太平洋での日本の戦争については、報道量が限られているものの、大戦の重要な側面であったアフリカ(カメルーンや東アフリカなど)での戦争は、筆者が予想していた以上によく報じられている。

総力戦となったこの大戦では、「銃後」の役割がきわめて重要であったが、その様相も見ることができ、敵側のクルップ社の大砲生産現場の写真さえ掲載されている。この面で特筆すべきは、総力戦体制への女性の貢献を反映して、「女性と戦争」という写真入り記事が継続的に載せられていることであろう。また、飛行機から写した空爆前後の地上風景のように、それまでの戦争では考えられなかった映像も盛り込まれている。破壊された人々の肉体など戦争の残虐な相貌はほとんど出てこないものの、この雑誌は第一次世界大戦についての視覚的資料の宝庫であるといってよい。

それに対して、*The "Manchester Guardian" History of the War* は、写真も含みつつ文章を中心として戦争の諸側面を詳しく説明した本であり、1914年を扱った第1巻から1919～20年を対象とした第9巻までの9冊から成っている。各戦線での戦況の記録が中心であるが、ここでも植民地の戦争協力や女性の役割は取り上げられている。アイルランドの「イースター蜂起」やその後の状況、ロシア革命などが詳しく論じられていることも、眼を惹く。また、第5巻の「極東での戦争」という章で、日本が中国につきつけた21カ条要求が全文掲載されていることに見られるように、史料への周到な目配りがなされているのも特徴的で、章の付録という形で史料が付加されている個所もある。

この本が、*Manchester Guardian* 紙の政治的傾向を反映して、比較的リベラルな視座から戦争を描いているのと対照的な雑誌が、大衆紙 *Daily Mail* 傘下の出版元から出された *The War Illustrated: Album de Luxe* である。小さな活字で組まれた署名入りの文章(第1号の巻頭には、「なぜイギリスは参戦したか」というH. G. ウェルズの文章が載り、コナン・ドイルの文章がそれにつづいている)と、多くの写真や絵から成っているこの週刊誌は、ドイツ兵を指して「フン」という蔑称を多用するなど、保守的、排外的色彩を露骨に見せている。こうした論調が、戦時のイギリスの大衆に受けたことを、忘れてはならない。

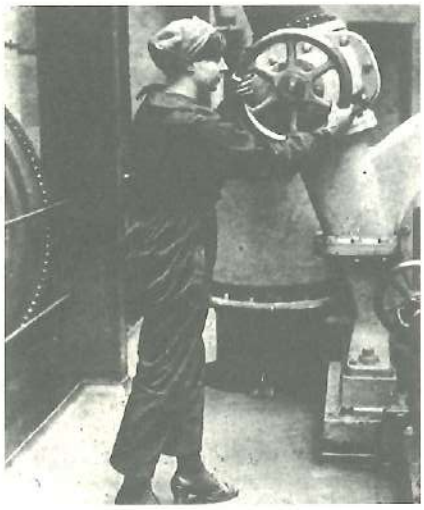
これと同じ出版社、編集者によって刊行された *The Great War ... I Was There!* は、以上の三つとは異なり、大戦期ではなく、大戦が終わってから20年後に週刊誌として出された雑誌である。第1号の刊行日1938年9月29日は、チェコスロヴァキアのズデーテン地方割譲をめぐって英仏などがヒトラーに譲歩したミュンヘン会談の日に他ならない。この雑誌は、次の戦争が迫っているのではないかという予感を抱きはじめたイギリス人に、第一次世界大戦の一日一日についての人々の記録や回想によって(たとえば、1914年の開戦の日については、外交官ハロルド・ニコルソンの文章が採られている)、「戦争についての人間的記録」を提示しようとしたのである。この雑誌の刊行終了が告げられたのは、1939年9月19日号であり、9月初めに開始した次の戦争に人々の意識を動員するために新たな歯車が回り始めた時であった。

このように、四つの資料は、同じ大戦を対象としていても、それぞれ内容構成も戦争への視角も異なっており、対象となった読者層にもずれがあったと思われる。一つ一つの資料をひもといていくことも興味深いが、戦争のさまざまな側面について各資料を比べながら読んでみることもまた有益である。この四つの資料を選んで刊行することを決断したアティーナ・プレスに、敬意を表したい。

第一次世界大戦とイギリス女性作家たち

河内 恵子●慶應義塾大学教授

第一次世界大戦はイギリス女性作家たちを強力に魅了し続けてきた。それは、この戦争がイギリス国民の、とりわけ女性たちの生きかたを大きく揺さぶったからであろう。家父長制度を守ろうとする保守的な女性たち、それに反してさまざまな場面で自立を求める「新しい女」たち、過激な活動も辞さない婦人参政権論者、過酷な条件の下で不満を押し殺して生きる労働者階級の女性たち—19世紀末から20世紀初頭のいわゆる世紀転換期を生きていたこれらの女性たちは、戦争という巨大なエネルギーのなかで一様にそれまでの生きかたを変えることを強いられる。男たちが戦地に赴いた後、バスやトラックを運転し、工場で兵器を生産し、軍服や防毒ガスマスクを縫い、農地を耕作したのは女たちだった。このように国内(ホームフロント)で働く者もいれば戦地(バトルフロント)にて救急車の運転手や看護婦として活動する者もいた。ヴィクトリア朝時代の根幹であった階級制度は崩れ、女性たちのあいだに一体感や平等意識が生まれた。いや、急いで付け加えれば、戦争観を軸にした新しい階級地図が出現した。



作家たちはこの新しい地図のありかたを鮮やかに描きだしている。当時の大人気作家M.コレリーは戦争支持を強く主張した。平和主義の立場を貫いたV.ウルフは新しい手法を駆使して戦争の虚しさを捉えた。大学を中退して恋人を追って戦地に赴き、そこでの看護活動体験を具に記したのはV.ブリテンだ。R.ホールは同性愛者の生を戦争を背景に描写した。誤解を怖れずに言うならば、戦争は多様性に富む文学を創りだしたのだ。そして、この「第一次世界大戦文学」は現代ではP.バーカー、S.ヒルといったきわめてすぐれた作家たちによって展開されている。

この度復刻された新聞資料を見たとき、「写真とペン」の力がそこにあることを認識した。それは当時を生き、書いた女性作家たちと現在を生き、第一次世界大戦を書く作家たちの世界が私のなかで結びついた瞬間だった。

第一次世界大戦とイギリス政治

小関 隆●京都大学准教授

第一次世界大戦(以下では大戦)期のイギリス内政が抱える最大の懸案はアイルランド問題であった。ナショナリストの宿願であったアイルランドへの自治権付与は実現目前に漕ぎつけていたが、アルスター地方を拠点とするユニオニストが強硬な反対の姿勢をとり、イギリス政府による妥協の模索が功を奏さない中、双方の義勇軍も設立されて、内戦の勃発を危惧する声もあった。いわゆる「7月危機」の最中にも、世論の関心はヨーロッパ大陸よりもアイルランドに向けられた。大戦の勃発は情勢を一変させる。ナショナリスト指導者が戦争協力方針を打ち出したこともあり、約20万人のアイルランド人がイギリス軍兵士として従軍するのである。第二次世界大戦の際に中立を保ったアイルランドにとって、大戦は史上最大の戦争であった。今回の復刻資料集に収められた *The "Manchester Guardian" History of the War* は、戦争協力方針の反響や募兵運動の様子からイースター蜂起の衝撃とその余波までを詳細に伝える第一級の資料といえる。特に豊富に添えられた写真は貴重である。

また、*The War Illustrated: Album de Luxe* に掲載されているH.G.ウェルズ「イギリスはなぜ参戦したのか?」は、『戦争をなくすための戦争』(1914年)の著者の思いを端的に表明した文章として実に興味深い。

平和主義を志向する一方で、ウェルズは、「プロイセン帝国主義」を打倒し、「狂気を祓い浄める」ために、大戦という「平和のための戦争」を熱烈に支持した。「最後の戦争」「戦争をなくすための戦争」といったフレーズはイギリス国内の反戦主義を封じ込めるうえで力を発揮したのだが、次なる世界大戦が惹起されたことを知る私たちの耳には痛みをもって響く。

開戦100周年を控えた今、大戦を知るうえで有益な資料を他にも数多く収録するこの復刻資料集が広く読まれ、大戦認識の深化を促すことを期待したい。

よみがえる第一次大戦期のまなざし

立野 正裕●明治大学教授

二十世紀の運命を決定することになった第一次大戦開戦から、ちょうど百年という歳月がめぐって来ている。当時の定期刊行物など多くの第一次資料が、海外現地の図書館や資料館に出かけなければ参照できず、研究者たちは長いあいだ隔靴掻痒の思いを禁じ得なかった。アティーナ・プレスの意欲的で良心的な企画により、順次刊行される運びとなった第一次大戦資料集は、この渇を大いに癒してくれることだろう。

たとえば『マンチェスター・ガーディアン』紙による別冊「戦史」シリーズ全九巻(*The "Manchester Guardian" History of the War*, 9 vols.)などは、とくに興味深い資料と言わねばならない。同紙は現在の「ガーディアン」紙の前身にあたるが、当時から大衆におもねらず、つねに公平と質の高さを目ざしてきた。編集責任者のC・P・スコットを始め同紙の記者たちは、英国が中立の立場を取ることを開戦前は主張した。同紙が政府擁護に転じたのは開戦後のことである。すなわち当時の戦争の熱狂とそれに迎合する多くのジャーナリズムのなかで、相対的にではあれ、戦争の推移を客観的に見ようと努めたほとんど唯一のジャーナリズムが同紙だった。

その格調の一端を示す一文が、一九一六年刊行の同『戦史』第四巻のなかにも見られる。「戦争詩人」ルパート・ブルック(1887-1915)の夭折を悼み、その詩を考察した次のようなくだりだ。「他人の命を軽視するのは厭うべきことだが、理想のため自らの命を軽んじるのは人間精神の高さの勝利であって、あらゆる道徳的良心と名誉を支持することである。ブルックの五つの詩に鳴り響いているのは、個人としてこの試練を受け入れた人間の喜びである。これらの詩編は人間の魂にじかに呼びかける。際物としての魅力をきっぱりと乗り越え、愛国主義の絶頂さえも超越する。」

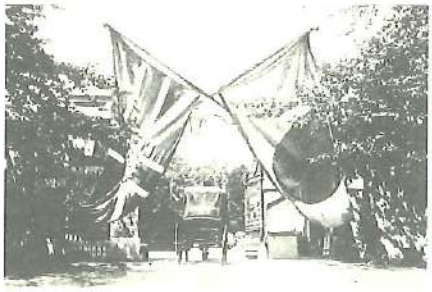
ブルックはダーダネルス海峡作戦に従軍の途次、エーゲ海で病没した。享年二十七歳だった。その生涯と詩の意義を、他の戦争詩人たちのそれとともに、同時代と現代の両方の視点から再考しなくてはならないと考えているわたしのような研究者には、このような視点はきわめて重要な意味を持つものだ。なぜなら、同時代のジャーナリストによって示されたその真摯さと真剣に向き合ってこそ、現代からの視点がはじめて可能になるからである。

記録に複数の記憶を重ねる
―復刻資料を読む醍醐味

井野瀬 久美恵●甲南大学教授

An Indian Camel Corps: A Camel Corps from Bikaner is included in the Indian Expeditionary Force. (Central News)

第一次世界大戦は帝国の戦いであった。それを喧伝したのは新聞、雑誌を中心とするメディアであった。今回復刻された *The "Manchester Guardian" History of the War* のページを開けば、ターバンを巻いたインド槍騎兵、ラクダにまたがって一列に並んだビカネル［インド北西部］の部隊、豪華に着飾ったマハラジャ父子といった写真がつぎつぎと飛び込んでくる。当初、ヨーロッパで何が起こったかが飲み込めなかったインド現地の上層部が、帝国の大義のために続々と立ち上がる様子を記事は伝えているが、そこでも目を惹くのは、「典型的なシク教徒」「典型的なベンガル槍騎兵」などのキャプションに彩られた写真である。ニュースの視覚化――それにしても、この既視感は何だろう?



この問いは、新聞読者だった（あるいは読者と想定された）当時の「白いイギリス人」がこれらの写真に何を見たかへと向かい、そこにある出来事を思い浮かべる。1897年6月、帝都ロンドンの通りを各植民地軍隊が練り歩いたヴィクトリア女王即位60周年式典（ダイアモンド・ジュビリー）だ。「われわれの国土は世界の隅々にまで広がっている」と多くの国民に実感させた王室儀礼の記憶は、当時まだまだ鮮やかだっただろう。そう教えるのは、われわれ同時代の記憶、2012年6月に行われた現英国君主エリザベス2世のダイヤモンド・ジュビリーである。

ひとつの記憶は別の記憶を刺激する。こうして、われわれの記憶は幾重にも重なり合いながら、「歴史的事実」を作りあげてきた。そこに生まれる誤解や曲解（の可能性）を意識して、写真と言説で再構成された「この戦争」を読む――復刻された歴史資料の醍醐味もまた、まさにそこにある。

女性は大戦をどう生きたのか
～「銃後の戦い」をあぶりだす貴重な史料～

林田 敏子●摂南大学准教授

戦争中ほどジェンダーの境界が強く意識される時代はない。武器をとって戦うことが絶対的な価値をもつ戦時にあって、「戦えない」性である女性は、平時以上の周縁性をまぬがれえないからである。しかし、第一次世界大戦が国民を広く巻き込んだ総力戦であったことを踏まえるならば、銃後を生きた女性への着目は大戦の全容を明らかにする上で不可欠であるといえる。

このたび、'Athena Sources in the History of World War I' として復刻される史料はいずれも、イギリスの主要紙が手がけた定期刊行物で、豊富な写真と網羅的なトピック、女性を含む豪華な執筆陣を特徴としている。たとえば、そのなかの一つ *The Illustrated War News* の New Series には、「女性と戦争」と題する一連の特集記事が組まれており、非戦闘員である女性に対する関心の高さがうかがえる。

大戦中、多くの国では女性に兵士としての資格を与えなかったが、前線には、負傷兵の救護にあたった赤十字部隊や、後方支援活動に従事した陸軍女性部隊など、少なからぬ女性の姿があった。また、銃後の世界においても、女性は出征した男性の代替労働力となることを期待された。その職域は、伝統的に「男の仕事」とみなされてきたバスや路面電車の車掌、ポーター、郵便配達といったものから、農地や炭鉱での肉体労働、熟練技術を要する工場労働や一部専門職にまでおよんだ。

兵士になるか、ならないかという選択肢しかもちえなかった男性に対し、「兵士になれなかった」女性の前には、戦前とは比べものにならないほど多くの選択肢が存在した。前線から銃後まで、大戦の実相を活写したこれらの史料は、女性たちの多様な大戦経験をあぶりだす上で、貴重なツールとなるに違いない。